

今回は、平和について考える詩を紹介します。八月は、六日、九日、十五日と、先の戦争に係る日が続きます。それは、過去の過ちを忘れないためであり、平和な世の中が続くためには、どうすれば良いのかを考える日でもあります。今では次々に戦争を体験した人が亡くなられて、過去の愚かさが忘れられようとしています。そんな今だからこそ、どんなことがあったのかをしっかりと学び、伝えて行くこととする気持ちをもってほしいと思います。

八月六日

峠三吉

あの閃光が忘れえようか  
瞬時に街頭の三方は消え  
押しつぶされた暗闇の底で  
五万の悲鳴は絶え

渦巻くきいらい煙がうすれると

ビルディングは裂け、橋は崩れ

満員電車はそのまま焦げ

涯しない瓦礫と燃えさしの堆積であった広島

やがてボロ切れのような皮膚を垂れた

両手を胸に

くずれた脳漿を踏み

焼け焦げた布を腰にまとい  
泣きながら群れ歩いた裸体の行列

石地蔵のように散乱した練兵場の屍体

つなかれた筏へ這いより折り重った河岸の群も

灼けつく日ざしの下でしだいに屍体とかわり

夕空をつく火光の中に

下敷きのまま生きていた母や弟の町のあたりも

焼けうつつり

兵器廠の床の糞尿のうえに

のがれ横たわった女学生らの

太鼓腹の、片眼つぶれの、半身あかむけの、丸坊主の

誰がたれとも分からぬ一群の上に朝日がさせば

すでに動くものもなく

異臭のよどんだなかで

金ダライにとぶ蠅の羽音だけ

三十万の全市をしめた

あの静寂が忘れえようか

そのしづけさの中で

帰らなかつた妻や子のしろい眼窩が

俺たちの心魂をたち割って

込めたねがい

忘れえようか！

私は広島を証言する 栗原貞子

生き残ったわたしは

何よりも人間でありたいと願

わけてひとりの母として

頬の赤い幼子や

多くの未来の上にかかる青空が

或日突然ひき裂かれ

かすかすの未来が火刑にされようとしている時

それらの死骸にそそぐ涙を

生きているものの上にそそぎ

何よりも戦争に反対します

母がわが子の死を拒絶するそのことが

何かの名前で罰されようと

わたしの網膜にはあの日の

地獄が焼きついているのです

逃げもかくれもいたしません。

一九四五年八月六日

太陽が輝き始めて間もない時間

人らが敬度に一日に入ろうとしている時

突然

街は吹きとばされ

人は火ぶくれ

七つの河は死体でうずまった。

地獄をかいま見たものが地獄について語る

とき地獄の魔王が呼びかえすと

言う物語りがあったとしても

わたしは生き残った広島

の証人としてどこへ行っても証言

します

そして「もう戦争はやめよう」と

いのちをこめて歌います。

八月十五日

のぐちしげお

みんな広間に集まった。  
ラジオがピーピー鳴っていた。  
天皇陛下の  
重大放送があるのだ、という。

「気をつけー！」  
先生の声に

みんな気をつけをした。  
「天皇陛下のご放送です」  
と、先生がいった。  
だが雑音で  
ちっとも聞きとれなかった。

「日本は、  
戦争に

負けたのです」  
とぎれとぎれに先生はいつて  
あたまをたれた。  
みんなもあたまをたれた。  
蝉がしきりに鳴いて  
むし暑い日であった。  
もう、戦争は終わったのだ。  
ぼくたち、いつ東京へ  
帰れるのだろうか。  
それからの数日は  
その話ばかりであった。

ぼくたちの疎開は何であったか。

東京大空襲で両親を失った  
のんちゃんときみちゃんは、  
いつもだまって  
ぼくたちの顔を見ていた。

わたしが一番きれいだったとき

茨木のり子

わたしが一番きれいだったとき  
街々はがらがら崩れていつて  
とんでもないところから  
青空なんかが見えたりした

わたしが一番きれいだったとき  
まわりの人達が沢山死んだ  
工場で海で名もない島で  
わたしはおしゃれのきっかけを落してしまった

わたしが一番きれいだったとき  
だれもやさしい贈物を捧げてはくれなかった  
男たちは拳手の礼しか知らなくて  
きれいな眼差だけを残り皆発っていった

わたしが一番きれいだったとき  
わたしの頭はからっぽで  
わたしの心はかたくなで  
手足ばかりが栗色に光った

わたしが一番きれいだったとき

わたしの国は戦争で負けた  
そんな馬鹿なことであるものか  
ブラウスの腕をまくり卑屈な町をのし歩いた  
わたしが一番きれいだったとき  
ラジオからはジャズが溢れた  
禁煙を破ったときのくらくらしながら  
わたしは異国の甘い音楽をむさぼった

わたしが一番きれいだったとき  
わたしはとてふしあわせ  
わたしはとてもんちんかん  
わたしはめつぽうさびしかった

だから決めたでければ長生きすることに  
年とつてから凄く美しい絵を描いた  
フランスのルオー爺さんのように  
ね